

---

# 妄想ウサギSIDE

鈴木真心

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妄想ウサギSIDE

### 【ZINE】

Z0180Z

### 【作者名】

鈴木真心

### 【あらすじ】

脳内ストックされたまま、途中まで書いて放置、そんなジャンル  
諸々なお話の数々。

連載にするつもり（だつた？）ネタ置き場的タイトル。

続くかもしれないし続かないかもしれないしわからないものばかり  
なので、続きはあまり期待出来ません。

超不定期投稿。

## 少年ウサギ・そのいち

僕はウサギ。

耳がついて尻尾が丸くて白いやつじゃない。

名前がウサギなだけで、生物学上は人間の男だ。

名前の割りには整った顔とさらさらの黒髪だつたりする。

僕は喧嘩が嫌いだけれど、何故かいつもふつかれられる。

何故だらうかと何度も考えてみたけれど、そのところはいまいちわからない。

そういうふう考えてこるついで、やつぱりまた、ふつかれられた。

「おに田中、お前いけすかねえんだよ。」

「どうして？」

「ウサギとかいう名前のくせして、眼鏡なんか掛けやがって！」

「目が悪いからね。ああ、君も掛けたいのかな？けど、眼鏡掛けたからって誰でも賢くて美しくなれるわけじゃないんだよ、郷山田くん。」

ああ、郷山田くんが憤慨してしまった。  
的を射た的確な発言をしただけなのに。

「ふざけんなー。」

ひらひ。

突進してきた彼を華麗に避けて、僕は胸ポケットから赤いハンカチを取り出す。

喧嘩は嫌いだ。

だから僕は、決して闘わない。

避けて避けて避けまくる。

闘牛士の如く、赤いハンカチをひらひらとさせながら。

「君はがさつだなあ。美しくないよ。ああ今のは見た目のことじやないからね。」

「う、うるせえ！ハンカチなんかで闘いやがって！だからいけすかねえんだよ！」

「どうしてわからないのかな。」

ひらり。

赤い色に興奮気味の彼を挑発し、僕はまた華麗に避けて見せる。ああ虚しい。

お師匠様は、こんなことのために僕にハンカチ技を教えたわけではないというのに。

切なさに胸を締め付けられる思いで、今日も僕は、ハンカチと共に舞う。

## 少年ウサギ・それに

世の中は常に騒がしい。

いつも通りアイロン掛けしたハンカチを胸ポケットにしまって、一歩づきを出た途端、そんなことを思った。

「お前の美形面に腹が立つんじゃ！」

「立つんじゃ！って言われても…って、イタツ。」

斜め向かいの玄関先で、二コチン中毒女…基い、ヒナコさんが、既に何人かさえわからしかねる美形、ルビーさんを足蹴にしていた。

「イタツとか可愛い子ぶつてんな！男の癖に…男で美形で外人さんか！？え、このやろ！」

「痛いよヒナコさん…男で美形で外人つて俺の所為じやないし…。」

最もな台詞を吐いたルビーさんに、心中密かに頷いて同情した。けれど、”渡辺ヒナコ”は大和民族まるわからりな名前だとしても”車谷ルビー”ではそう言われても仕方ない気がしなくもない。そう言う僕も”田中ウサギ”だからか、ヒナコさんには目を付けられている。

至極、迷惑極まりない話だ。

「…早々に立ち去りやつ。」

小さく呟いて、しかし、学校へ行くためには通りがかるを得なこそこの足早に見てみぬ振りでやり過いそうとした。

が。

「天誅、ハンカチ少年！」

あられもない台詞と共に、ドロップキックが跳んできた。  
ひらりと躲し、颯爽とハンカチを取り出す。

「ヒナコさんも憲りないですね。」  
「何をう…？やるか、ハンカチ！」  
「望むところです。」  
「え、ヒナコさん、俺は？」  
「黙つとけ美形！」  
「いつも思つけど…ヒナコさんのそれ、誉めてるの？」

がつつと小気味よい音がして、ヒナコさんの墜落としがルビーさんに綺麗に決まった。

「こぞり、尋常に勝負！」

地を蹴るヒナ「さん。

揺らめくは、くわえ煙草の煙とハンカチ。

そんな僕の、いつもの朝。

## 少年ウサギ・そのさん

僕のハンカチーフが盗まれた。

大変困つたことだが、困つたことはこれだけでなく。

「…あの人だな。」

犯人の目星がいとも容易く付いてしまうことだった。

面倒だとは思えど、あれは代々田中家に伝わり祖父から受け継いだ由緒正しき赤いハンカチーフ。

このままにしておく訳にはいかないし、このままにしておいたとしても、どうせあの人はドアを蹴倒し、喚き散らしながらうちにやって来るだろう。

「何て面倒くさい人なんだ。」

そう眩いでから、僕は溜め息混じりに斜め向かいのあの人々の家へと足を運んだ。

「あれーどうしたのさハンカチ少年。」

控えめにノックをしてドアを開ければ、くわえ煙草で面倒くさい人

ヒナコちゃんが、やる気なくソファにじだりけながらひらひらしていた。

「相変わらず」「チキン中毒ですね。」

「お前はんち来て第一声がそれか。」

最もな「メントは敢えてスルーする。

「あれを返してくださいませんか。」

「あれ? どれ?」

「そんなすつとぼけたボケはいりません。」

「ボケてねえよーあたしはまだまだピッヂピチだ!」

毎度のことながら、どうも話が噛み合わない。

ヒナコさんの脳細胞は、果たしてちゃんと機能しているのだろうか。余計なお世話かもしれないが、生活費はどこから出しているのだろう。

そう言えば、ヒナコちゃんは働いているのだろうか。

「あんた、一体何しにきたつてのよ。」

だらだらしながらだらだら話すヒナコさんを一瞥して、こんなどうしようもない人間を雇うお人好しがこの世にいるのだろうかと、どうでもいいことを考えてしまった。

「あの、生活費は一体どーから…」

思わず口から思考が漏れたとき。

「あ、ウーチャんじゃないかー。どうしたの？」

「ウーチャんはやめてください。ていうか、またいたんですねかルビーさん。」

ヒナコさんのパシリとしての人生に疑問を持つていらないだろうルビーさんが、キッチンからひょいと現れた。

「ウーチャんも食べる？ 今日のお昼はチャーハンだよ。」

「チャーハンはどうでも…あ。」

「あ？」

フリフリのHプロンを身に付けたやたらと美形な彼が布巾代わりに

手を拭いている。それ。

真っ赤で高貴なを漂わすそれは。

「…貴方でしたか。」

「チャーハンは？」

「…いただきます。」

僕のハンカチで手を拭く満面笑顔のルビーさん。それ以上は、何も言つことが出来なかつた。

「あんた昼飯たかりに來たのかよ。」

「結果的にそうなつたままでですが。」

後日。

ルビーさん宅の物干しにはためくそれを、そつと取りに行つたことは言つまでもない。

「ルビーさんには…言えないな。」

彼の憂うべく人生とこれからを考えながら、只、遠い目でそつ狂い  
た。

ペリカーズム 単位は“柱”です

「今日もいい天気だ。」

煎れたての緑茶片手に、うーんと伸びをして、澄んだ青空に目を細めた。

うんうん、とても清々しく素敵な朝だと思つ。

大満足。

ちーちゃん（彼女）は今頃、ラクダに跨がつて悠々と出勤中なんだろつなかとか、これまた清々しく、頬を緩めて考えてたりした。

僕はペリカ・ココ・町村。

オレンジの髪にグレーの瞳をしていて、自分でも正直、何人なのかも既にわからない。

町外れのこの村で、占い師をやつていたりする。

最近の僕の興味は、お隣に住んでる眼鏡少年と、斜め向かいの二コチン中毒な彼女と、そのお隣の少しだつ氣があると思われる美形な彼だ。

「ヒナコちゃん。」

朝っぱらから堂々と二コチン中毒な彼女、渡辺ヒナコさん宅に了承なく乗り込んでいくMな彼、車谷ルビーくんの姿が見えた。  
ああ、毎度のこととは言え、僕はわくわく…いや、はらはらしてしまつ。

「ルビーーてめー！あたしはまだ寝てたんだよー。」

「イタツー… 酷いよ、ヒナコさん…。」

外にまで響き渡るガシャーンっという音と、打たれ強いのかんまりこたえてなわざうなルビーーくんのちょっと氣の抜けた声。

「今日も平和だなあ。」

呟いて緑茶を見れば、茶柱が立っていた。

「柱つて、神様を数える単位だよね。」

てことは、僕の緑茶に一柱。  
神様が降りたつてことで。

「いいことあるかなあ、ちーちゃん。」

「え、僕は田中ウサギですけど。」

ちょうど前を通り掛かったお隣さんに、怪訝な顔でそう言われてしまった。

忙しいんです。

大学事務つてのはまあ、意外や意外、忙しいものでして。休講のお知らせを出してみたり、警告書を発行してみたり、経理のお手伝いしてみたり、ときにはお茶出してみたり。

「あかりちゃん。」

ああ、忙しい忙しい。

「ねえ、あかりさんってば。」

忙しい忙しい、忙しいつたらない。

「あかつさーんってーばー、もひ。

「忙しいつつつてんじや！クソガキが！」

にっこりと笑顔を浮かべ、ついでにキラキラエフェクトで眩しさを撒き散らす男に、罵声を投げつけてやった。

どうだ、参ったかこの野郎！

「忙しごつてんじゃーつて…今、初めて聞いたけど?」

「モノローグで散々言つたんだよ!」

「わかれよ、そのぐらー!」

「わかつて、わかつてよ、お願ひだから!」

「あたしは今、仕事中なんですよ?」

「お氣楽極楽大学生に構つてやつてる暇はないんですよ。」

「だつてあたしは、社会人だから!」

「そんな訳で、早く講義に戻りなさい。」

「最もらしい理由で、スマートに返すあたし。  
流石は社会人!」

「学生さんとは訳が違つてね!」

「でも俺、今は空きなんだー。」

「何ですと?」

「ほり、”倫理学休講”ね?」

携帯を突き出して今日の休講予定をあたしに見せてくる」こと。

あ、クソ、マジだ。

毎日毎日飽きもせず事務室に通つてくるこの男、顔がよければ頭もいい。

ついでに、体もよければ人当たりもいっていいね。

久留米航太、二十二歳。

またの名を『イラつくほどの美人』。

…カツ『いいとかじやない、男前とかでもない。

男なのに『美人』なのだ。

神様、不公平じゃあないでしょつかね？

「だからせ、あかりさんもうすくお昼でしょ？一緒に食べよつよ。」

「ね？」と上田遣いでおねだり攻撃を仕掛けてくる。

ヤメロ！

マジで！

そのエフェクトは外せんのか！

「ああ、いいですよ真壁さん。久留米くんも待つてるみたいですし

ね。」

ああ事務長（男）！  
何、エフェクトと顔にほだされとんですか！

「やつたー！あつがとう、事務長さよ。」

にっこりと事務長に笑顔を向けた航太を見て、ほつ…と感嘆を漏らすその他大勢。

ちょつとちょつと…

あたしはこいつのせいだ、仕事が進まないんだつてば！

「いえ、遠慮し…あああああ、遠慮するつひとつてんじやんかああああ…」

「行こう行こう、あかつさん。」

あたしの言葉は誰に聞き入れられることなく、半ば引き摺られるように、航太によって連れ出された。

この、クソガキヤー！

ああ、周りの同僚達の温い視線が痛い…。

「何食べたい？」

「…何でも。」

「じゃあ、俺あかりさんを…」

「却下じゃバカたれが！」

「どうでもいいけど、あかりさんで言葉おかしことあるよなー。」

…「ひめこ」わ！

真壁あかり、二十六歳。  
とある大学事務員です。

何故か毎日『美人』がやつてきては、仕事を妨害してこきます。

神様、人に一物以上をお与えになるのは、やめた方がいいと思いま  
す。

大事なんです。

カタカタとパソコン画面に向かうあたしの顔は、きっと、出来る女そのものに違いない。

違いない！

そうに違いないわ！

「真壁くん、その…」

「何ですか。」

おやおやおやおやといった感じで話しつけてきた事務長に振り向かせらず、手も止めず、短く応える。

今いいとこなんです。

邪魔ならしないでくださいませんかね。

「それはその…いいのかね？」

「何がですか。」

「何つて、その、うーん…。」

言葉を濁す事務長の言いたいことはわかる。

わかるけども。

今しかない！

今しかないんですよ！

わかつてくださいよ、事務長！

「大丈夫です、今日の仕事は終わつてますから。」

「そ、そつかね。それはいいんだけどね、真壁くん……。」

事務長、つるせいな。

そつ思つて振り向こいつとした、

そのとや。

「でもねーあかりさん。それ、個人情報だよ。」

のしつと背中に感じた重みと体温。

華奢に見えて、やつぱり男なんだなあとかうつかり思わせるそれ。

出た！

予定より早い！

「…離れてくれないかね、久留米くん。」

「久留米くんだなんて、やだなー。航太って呼んでくれていいの。」

「

「呼ばんわーはーなーれーるーー。」

事務長そつちのけで、あきゃあきゃあと藻搔くあたし。

久留米航太の腕はあたしの肩に回されたまま、それでも離れることはなかった。

「何でーるのやーー。今はまだ講義中な筈でしょ、うがー。」

自由のあくね手で、ずばりとパソコン画面を指した。

そひ。

あたしはこいつのしつつこいつベタつきとお誘いから逃れるために、こいつのスケジュール一覧を作成しておいたのだ。

「言ひとくねー。データベースに侵入した訳でも、あなたの手帳盗んだ訳でもないかんねー。」

尾行といつ正規の手段により手に入れた情報なんだからー！文句は言わせねえ！

「あ、そつか…なら、いいんだけどね。」

そんなことを漏らしてから事務長がほつとしたけど。

今はそれどこりじやない。

腕を剥がすのに躍起になつていれば、むかつくほどに綺麗な指が、むかつくほどに綺麗な笑顔で、

ぱちっと、

パソコンの電源を、切つた。

切つた…

…切つた？

「なああああ…? ? ? ? ?」

「今の講義ね、小テスト終わつたらあがりだつたんだよな。」

「聞いてねえよ…」

「そんな」とは聞いてない！

あんた今、あんた今、何しやがつたんだー！…！…！…！

「それも聞いたじゃん。」

「あああああ… あたしの、あたしの努力の結晶が…」

がつくりとうなだれたあたしの耳元で、むかつく美人が、甘く甘く囁きを零した。

「... そんなに俺のこと束缚したいの？」

ああ、  
神様。

「あ、あかりさんもう仕事終わったんでしょ?」飯でも食べに行こう。

L

どうしてこんな。

「それからさ、あかりさんの」と食べて……

「いい訳あるかー！！！！！」

アッパー・カットを繰り出すも、難なくそれは躱されて。

「 まあ行こうつーすげ行こうつー 」

「 やだあああああー 」

またもや引きずられるように荷物ごと抱えられたあたしが、奴から逃げ切れたのは。

結局、ご飯を食べた後だった。

「 可愛いなー、あかりさんってば。 」

走って逃げたあたしは、奴がそう言つてへへへす笑つていたことなんて、もちろん知らない。

喜んだんです。

さてさて。

大学はもうすぐ夏期休暇、いわゆる夏休みに入る訳で。

「嬉しい！嬉しい！ちょお嬉しいです事務長！」

「や、そうかね。」

若干引き気味の事務長相手に、あたしは、ガツツポーズでそう宣つていた。

そうは言つても。

あたし達は一ヶ月近く丸々休みがある訳じゃない。

後期からの講義申請やその他に備えて、それなりに仕事はあつたりする。

あ、講堂の掃除の手配とかなきやな。

夏期の資格講座のスケジュールも作つておかない。

ある意味、いろいろなことに追い込み作業はあるものの、それでも緩む口元は隠せなかつた。  
何故ならば。

「あつかりさん。」

ばたーんっと事務室のドアを勢いよく開けて乗り込んできた美人があたしの元へと、一直線に駆けてくる。

だって、  
だって、

夏休みとなれば。

「こいつがいないんですよ、事務長ー。」

「ああ、そうこいつ」と。

聞いてもいらない事務長に笑顔満面でそいつ言えば、納得したのか、事務長は苦笑でそう返した。

「何の話？」

「うふふふふ。」

「気持ち悪いよ、あかりさん。」

うつむきわ！

何とでも言つがよろしい！

今日のあたしは挫けない！

強い子元気な真壁あかりですから！

「強い子元気つて。」

「モノローグ読まれたって平氣だもんね！」

「それ、グリゴだよね？」

「ちょっと聞いてんの？」

がつと奴の襟首を掴んでがつくんがつくん揺らじしてやる。  
教えてやる、教えてやるとモロの朗報を！

「もうすくべー夏休みだからー！あんたとー会わんで！済むんだ！ヤッホー！」

「テンション高いねー、あかりさん。」

天高く拳を突き上げたあたしと、揺さぶられながらもモロモロして  
るここつ。  
どちらにかは知らないが、微妙に温い視線が、間違いなく注がれて  
いた。

「ナビねーあかつさん。」

「のとやのあたしよ。」

「盛り上がりつてるとこ悪いけど、」

まだ、

「…何よ?」

まだ、

「…言いにくいくらいだがね、真壁くん。」

「…何ですか事務長。」

まだ、知らなかつた。

明後日の方向を向いた事務長が、申し訳なさげに告げた真実を。

「実はその…久留米くんのとこのサークルがね、夏休みに旅行に行くんだが…。」

「行けばいいじゃないですか。」

「あかりさんも行くんだよ。」

……はい？

え、何で？

奴の襟首をひつ 捄んだまま、ぽかーんと事務長を見詰めること数秒。

「大学の宿舎の食堂係が辞めちゃってね、学長がよろしく頼むつてうちに言つてきたんだが…」

つまり。

そうは言われても、事務室職員は皆既婚者で。  
スケジュールの都合上、たまたま空いてたあたしに白羽の矢が立つ  
ちゃつた訳で。

しかも。

そのサークルとやらにこいつがつっかりいたりしちゃつた訳で。

「…………マジでか。」

「マジだよ。」

「……すまんね。」

明後日を向いたままの事務長のつるっぺに田を締め、あたしは密

かに、涙を飲んだ。

「楽しみだよねー。」

「…そうだね…。」

がくりとうなだれたあたしの横は、対照的にキラキラエフェクトで眩しく。

また、涙が出た。

お母さん！

あなたの娘は、何だか泥沼ですよー！

御免なんです。

青い海、白い雲、眩しい太陽に…

「……はあ。」

溜め息混じりなあたし。

そう、来てしました。

むかつくほどの美人率いる『恐怖の夏合宿』に！

ああ、日差しに倒れてしまいたい。

そして救急車で運ばれて、熱中症だからすぐ帰宅しなさいとかドクターストップ掛けかって、わだかまりもないままに『それじゃあ仕方ないよね』的な空氣で意氣揚々とこの場を去れるのに…

「まだそんなこと言つてるのは、あかりさん。」

出た。

「言つてませんが。」

「モノローグで。」

だから、お前はエスパーか。

「毎回読まないでよ、プライバシー侵害しまくりだよそれ。」

「だだ漏れなんだもん。」

につこにつこと相変わらずなエフェクトを飛ばすは、事の元凶、久

卷之二

あたしは極力関わりたくないから自力で行くと言つたのに、無理矢理サークルメンバーの車に押し込まれた挙げ句、ちゃつかり隣に座りやがつて、根掘り葉堀り根掘り葉堀り…

「お前は何なんだ！」

「まあまあ。」

何がまあまあなのか！

何が！？！？！？！

いつものJET、JETのHフロクトで倒れたらいいのに、あたし。

「……はあ。」

「溜め息吐くとしあわせ逃げるよ。」

「…もう逃げてる。」

あんたの所為で。

見上げた空はやつぱり青く、少しだけ、これからに涙した。

「何あいつ。」

「航太にべたべたしちゃって。」

冷たい視線と大いなる誤解には、まだ、気付くことなく。

500万が498万になつちゃうかどいいの？（前書き）

会話の応酬だらけです。  
文とは言えない小話シリーズ。

500万が498万になつちゃうかどこの?

だいちゃん「500万かーどうやつかなー」

ヒロシ「あ、だいちゃん!」

だ「おーヒロシ、お前何やつてんの?」

ヒ「生きてんの」

だ「知つてるから。そりじゃなくて。……働いてんの?」

ヒ「働いてるよーバイトで!」

だ「バイトつて」

ヒ「結構きつきつだけど」

だ「月いくら?」

ヒ「5万!」

だ「5万で (・・・)」

ヒ「結構大変なんだぜー時給850円だしねー」

だ「850円で (・・・)」

高校生並みの時給なヒロシ。

だ「……いくらかやろつか? (ちょっと可哀相になつた)」

ヒ「え、何で何で何で!?」

だ「いや何かわ、急に仕事 ( だいちゃんは大学生でヨーネ系の仕事も自分でやつてゐ) で儲かつちゃつて、500万あるんだ」

だいちゃんはいい人。

ヒ「えーいよ……悪こじちゃん

でも期待するヒロシ。

だ「んー (あんましやつてもこいつのためになんないか?) ……取り敢えず2万でい?」

ヒ「2万!?」

だ「うん」

ヒ「500万から2万もやつちゃつたら498万になつちやうじゅ

んー向かキリ悪こナビこのーー?」

でも貰ひ口ロジ。

だ「貰ひのか

ヒ「わー2万も貰つちやつた……わー

だ「足じてゐる(生活費の)

ヒロシは実家住ま。

ヒ「うさんー・ジ つまん行くねー」

だ「だから、生活費の足じてゐる

ヒ「お土産はジジのぬべーべーー?」

聞いてなこヒロシ。

ヒ「ターコイユーヤマキ」

だ「いやだから……。てか、お前ビリーバイトしてたの?」

今どきなかなか見ない。

(ある意味レア)

ヒ「もうすぐ春だからさー楽しみにいっぱいだなー」

だ「楽しみ?……まあ、いいけど。ちゃんと(生活費の)足しにし  
るよ」

だから、ヒロシは実家住まい。

しづらしくして。

だいちゃんの友人「あ、だいーー！」

だ「おう、どした?」

友人「この間さ、ジリ展示でヒロシ見たぜ。ジジのぬいぐるみ買つ  
てたけど」

だ「……」

ヤマ キも春です。

だこちゃん「もうすっかり春だなー」

ヒロシ「あ、だこちゃんー！」

だ「おー、ヒロシ。ヒロシのへんべー」

ヒ「バイト先ー。」

だ「バイトじゃなくー。」

ヒ「バイトは終わって帰つて来たんだけど、超重要なもの忘れたのー！」

だ「超重要なもの？」

ヒ「バイト先結構かかるんだけどー、やっぱ、超重要なものだからー！」

だ「だからそれ何だよ！」

ヒ「春のパン祭りでしょ？」

だ「『でしょ？』って言われても、

確かに。

ヒ「だーかーらーーーまつみ（松た子のじじい）が毎年ひ  
みしてんじやんー春のパン祭りだよーーー」

だ「（ああ、あれね）……それがどうしたんだよ。ああ、バイト先  
ディリーヤマ キだつけ？ フェアだから何か頼まれたとか？（何だ、  
ちやんと仕事やつてんのか……）」

ちょっとヒロシを見直すだいちやん。

が。

ヒ「違つよーだーちやん「違つのかよー」俺あれ集めてんのー！ ポイ  
ントシール貼つた紙、バイト先に忘れちやつたのーーー」

ヒロシ大慌て。

だ「ポイントついて……わざわざ買つてんの？（食パンを）」

ヒ「前でセーバイト中シールはがして貼つてんの話にびれひつ  
て。怒られたーーー」

だ「はがすなよ

それは怒られる。

ヒ「あ、急がないとだつたー。」

だ「そんな慌てなくて。明日でもここにじゅん、むづき牆せせ

ヒロシのバイトは主に田舎。

（朝は起きられない）

ヒ「だめだよ！夜バイトのやつらも集めてんの。取られたら大変だもん。」

だ「誰だよひへりごへり」

確かに。

ヒ「あつべさせひつべだよー。春のパン祭りは危険（？）がこいつぱいなんだよー。」

だ「危険が？春のパン祭りにっやマ キ春のパン祭りにっ？

ヒ「じゅーねー。急がないと、バイト先まで30分かーかーるーかーりーーー。」

だ「遠つ（・・・）」

だっこせんに見送られて、ヒロシは自転車で颶麿と去つていった。

だ「……春だなあ」

春ですね。

おはせど、それはおまごんですよ

道でばつたり。

? 「あらーだこちゃんじやないー久しふりねーーー」

だこちゃん「あ、ヒロシのおはせど。お久しふりです」

まさかのヒロシの登場。

だ「ヒロシせー」

ヒロシ「バイトよバイトー。トイワーヤマ キー」

だ「（まだやつてゐるんだ）……頑張つてますね」

ヒロシ「もうねーここの歳してからいつてーまこひきやうわーーー（モの翻りに明るいこー）」

ヒロシ母は根明。

（ヒロシとある意味そつくつ）

ヒロシ「あ、ちよつと待つて、待つててだこちゃんーーー」

だ「はあ……」

待つこと30分。

だ「はあ、まあ、だいぶ」

## ヒロシと激似な母。

だ「まあいいんですけど（慣れてる）何持つてきたんですか？」

「母、これねー、だいちゃんにあげるわー、つか、いつぱいあつてねー

だ「おばさん声でかこつすね」

母 やあたあーたんち  
木 木はーおはさん照れな  
木 うれー！

L

七八二二一

だ「そりすか（やつぱり慣れてゐる）」

だ「これは……」

ヒ母「ヤマ キ春のパン祭りで貰えるボウルだけ」

だ「えつ（・・・）」

これが噂のと思つただいちやん。

だ「い、いいんですか？ 確か、ヒロシがすつじい集めてるつて……（てか、いらない……）」

ヒ母「いーいーのーーーあの子毎年毎年貰つてきいて、ましこひましこひあるんだからー。」

だ「いっぴこつて……

ヒ母「50枚くらーい？」

だ「あり過ぎ（・・・）」

ヒ母「どうしょー？ 貰つて貰つてーだいたやんほら、一人暮らしだつて聞いたしねー。」

春のパン祭りボウルが、何かの足しになるのかは謎。

ヒ母「ね？」

だ「は、はあ……」

だいじやん、押しに負ける。

じめいへじこじ。

ヒロシ「あ……」

だ「み、ヒロシ。……どうした? 元気ないな(バイ)トびになつたとか?」

憔悴のヒロシ。

ヒ「実はさ、3年前の春のパン祭りでまつさん(松た子)がCで使つてたのと同じ型のボウルが、どうかいひやつて……はある」「もつと別のことで落ち込みよ」

ヒ「だつてだつてーあれ、シール30枚必要でーなかなか貯まらないで、俺、かなり苦戦したのにー……あ

ため息が止まらないヒロシ。

だ「そのボウルだつて、きっとどつかにあ……」

「・・・」

ヒロ「はーつー！」

だ「いれは……」

ヒ母「ヤマ キ春のパン祭りで貰えるボウルだけ」

回想終了

だ「あれか

ヒ「え？」

だ「いや、何でもない何でも」

ヒ「やつへじやあ俺、バイト行くから……まあ

心なしか、自転車もゆづくらなヒロシ。

それを見送るだいちゃん。

だ「やばいな、ヒロシの隣座ぶり、尋常じゃなん……」

ヒ母「あらーだーちやんー」

だ「あ、おはさんーあの、この間のボウルなんですねー」

ヒ母「あらー気に入ってくれたーー!?じゃ、ちょっと待つてー!また持つてくれるか」それはまずいんですよ「何で? (やめとん)」

だ「何でもです。ヒロシが激瘦せします」

ヒ母「やあだーだいやんてば超 意味わっかんなーー!」

だ「ねばねー、若いのはいいんですけどかく春のパン祭りシリー<sup>ズ</sup>はダメです。門外不出でお願いします」

ヒ母「えー

だ「えーじゃないです

ヒ母「50枚あるの!」

だ「あり過ぎですがダメですか

ヒ母「えー

えーと言つたヒロシ母の気持ちもわかる。

後日、だいちゃんはそっとヒロシ母に3年前の春のパン祭りでまつりんがCMで使つてたといふボウルを返却。

ヒロシは、

ヒ「あ、だいちゃん!」

だ「ヒロシ……（絶句）」

ヒ「あ、ばれたー? 悩みがなくなつてね、そしたらたくさん食べちゃつてー」

太つていた。

## マネージャー（専書）

所謂マナー。

だこひやん「あつこいなー」

ちつこひ

ヒロシ「あ、だこひやーん。」

「おひ、ヒロシ……おわあ瘦せる『おー』

だ「え? じやないえ? じや。それはない」

ヒ「あ、ひ、え?」

マヨネーズ手こ盤場のヒロシ。  
どこんと腫えてこん。

だ「お前を……夏バテとかないの? (なあうださぞ)」

ヒ「なー。」

だ「やつぱつないんだ……」

しかも、自転車の前カゴにはマヨネーズ常備（未開封）。

だ「(悪くなつそうだな)……で、どこへ行くの?」

「バイト！」

だマヨネーズ乗せて!?

遂に奇行に走ったヒロシを心配そうに見つめるだいちゃん。  
それは常であるとまだ認めたくないだいちゃん。

だ「おー、お前……」

ヒ「あ、やつばーい！急がないとバイト遅れちゃうからー。」

だ「あ、おい、」

「二つあるから、だいたい二つもあるね。」

(未開封) マヨネーズを手渡されるだいちゃん。

だ「い、いらな、」

ヒ「夜バイトのゆうくんと流行ってんのー! ちゅ

つ  
！  
じ  
や

「あねーー！」

颯爽と、しかし、心なしか前よりはあはあ言いながら去つていくヒロシを見送りながら。

だ「……マヨネーズ嫌いなのに」

（未開封）マヨネーズに、うつかり本音を零していただいちやんでした。

そしてヒロシは。

ヒ「最近体が重いなー」

気づいていなかつた。

ある日、洗濯機の中に腕が一本落ちていた。

「珍しい」ともあるもんだ

くわえ煙草でそいついたあたしに、遊びに来ていた後輩の深雪みゆきが「何かありましたか」と顔を覗かせた。

「前に蛙が干からびてたことはあつたんだけど」

「蛙ですか」

「うん蛙」

荻窪にも蛙がいるもんなのかと、そのときは感心したものだが。

「で、今回は何がいたんですか?」

「腕が」

「はい?」

「腕があつた」

「まつさかー」とけらけら笑う深雪みゆき、「だよねー」と笑つて、一回、洗濯機をばたんと閉めた。また開けた。

「やつぱりあるんだけど」

「蛙が?」

「いや、腕が」

「ううしたもんか、これはまいった。」

誰の腕かは知らないが、取り敢えず、あたしんちの洗濯機の中にいるのは困る。

やはり、都會とは物騒なんだろ'つか。

「ねー深雪」

「何ですか」

「腕つて生<sup>ハ</sup>ミ<sup>ハ</sup>であつてゐ?」

「粗大<sup>ハ</sup>ミ<sup>ハ</sup>じやない」とは確かですけど」

「肘下なら粗大じやないよね」

「そりですねー」と相槌を打つた深雪が、ビールを取りに冷蔵庫を開けた。

「先輩」

「ん?」

「粗大かも」

くわえ煙草で顔だけを部屋に戻したなら、冷蔵庫から顔を出した深雪と目が合ひ、

「ビールじゃなくて、肘上<sup>ハ</sup>が冷やされでます」

「やだ、肩下つて」と?・

「はー」

昨日の昼間に冷やしておいた筈のビールは、一体どこへ行つたのか。

「じゃあ粗大かなあ」

「分割されてるから、やつぱり生<sup>ハ</sup>ミ<sup>ハ</sup>いいんじゃないですかね」

「あんたが粗大かもつて」

「やつぱり生<sup>ハ</sup>ミ<sup>ハ</sup>ですよ」

ビニール袋にそれを詰め込む深雪に、「あ、これも」と洗濯機の中の腕も渡した。

何となく考えていたことを深雪に聞いてみた。

「二十五過ぎると妖精になれるんだって」

「何の話ですか」

「処女の話」

「処女なんですか」と聞かれて「違うけど」と答えた。  
 処女じゃないけどセカンドに突入してだいぶ経つ。  
 妖精になれなくても、穴は塞がるんじゃなかろうか。  
 いや、処女膜が再生しないことくらい、あたしだって知つてること  
 も。

「ちなみに男だと何になれるんですか」

「魔法使いだつて」

「魔法使いの方が格上じゃないですか」

確かに、妖精は魔法使いが連れてるイメージがある。  
 あんまり、魔法使いが妖精に連れられているイメージはないかもし  
 れない。

こんなところでまさかの男女差別だらうか。  
 いや、格差？

これが男女の格差なのか。

「根本から正していかないとね、やつぱりなくならないものかね」

「何の話ですか」

「格差の話」

「魔法使いの話だつたんじやないんですか」

「まあね」と答えてから、煙草に火を点けた。  
ああ美味しい、煙草が美味しい、人生は最高だ。

「いやはや、素晴らしい」

「魔法使いが?」

「いや、人生が」

「妖精の話はどうしたんですか」

深雪もまた煙草に火を点けたところで、妖精になつた自分を考えて  
みた。

「気持ち悪い」

「まあ、気持ち悪いですよね」

メルヘンは似合わない。

ファンタジーも似合わない。

人生は素晴らしい、が、人生とは現実だ。

「これ、どうすんの」

「見ないで返却も癪ですけどね」

レジで誤つて誰かのものと入れ替わつたらしいレンタルDVDに、  
溜め息が出て煙が揺れた。

「『Dカップハイスクール』って」

「『にゃんにゃん言わせて』って」

「まんまじやねえかよ」

登場する方々について、ある意味誰かの妖精なんだろうなとか、そ

んなことを考えてから。

あたしはやっぱり、妖精より魔法使いの方がいいよと聞いてみた。

「穴が塞がらない魔法とか使えるんですかね」

「カビが生えない魔法とかね」

さて、このロボロをどうしようか。

「アパートでぐだぐだしていれば、呼び鈴をえ鳴らす間に深雪が入つてきた。」

「ただいまでーす」

「何あんた、ここに住みこんだの？」

「そんなもんですね」

手にはしつかりと合鍵が握られていた。いつ作ったんだとか、もつ面倒でビリビリ。芋だらうがトマトだらうがビリビリといけビリ。

「え、芋育てますよ先輩」

「芋？」

「家庭菜園キット買つて来たんですよ」

よいしょっとあたしの皿の前にそれを置いて、やる気満々に腕まくりをした深雪を見上げた。

芋だらうがトマトだらうがビリビリといけビリ。

「ひひで育てんの？」

「他にどこで育てんですか？」

「あんたんちでやれば」

「ひひ引き抜つてだいぶ経りますよ」

「あ、そうなの」

「いふんとうちに座るなと黙つてたけど、何だ、もう住み込んでたのか。

「て、おかしくね?」「まあまあ

「もしかして体狙い?」「

「先輩が△カップだつたらそなかもしれませんけどね

失礼な。

「Aだつて需要あるよ」

「あるんですか」

「ないこたあないつて程度?」

「聞かないでくださいよ」

あたしにもわからん、と言つたなら、人間体じやないです顔ですと、  
実も蓋もない答えが返つてきた。  
どつちもどつちなあたしは、じゃあ、何で勝負に出たらいんだろ  
うか。

「だから家庭菜園ですよ」

そうなのか。

「ベランダ遊ばせているのはもつたいないですよ」

「で、芋?」「

「秋ですから」

「メロンがいい」

「それ夏ですから」

そつは言つけども。

「今から育てんだよね?」「

「はい」

何か？みたいに首を傾げた深雪は、ざわざわおつむが足りないと見  
た。

「今から育てたって今秋中には食えないじゃん  
「あ、」

『いーしゃーきこもつ、 焼き芋ー』

沈黙の中、お馴染みのメロディがアパート下を通りた。

「……買ひに行きません？」  
「屁こかないでよ」  
「先輩ここぞ」

家庭菜園キットは、間違いなくお蔵入りだと思つた。

#### 4 (前書き)

主催の短編投稿企画『酸欠』投稿作品を転載。  
企画テーマは『調味料』テーマは『味噌』でした。

今日も荻窪は晴れていた。

「味噌食べたくない空じゃないですか？」

「青いのに？」

「青は味噌ですよ」

そもそもが味噌食べたくない空つてのがよくわからないが、深雪は味噌を食べたいらしい。

てか、味噌食べたいって何だ。

窓から覗く空は青い。

そして、冷蔵庫をがさがさと漁つた深雪を視界の端に捉えていれば「じゃーん、味噌でーす」とか言つて、本当に味噌達が登場を果たした。

「味噌『達』ね」

「味噌です」

「複数系でしょ、てか何で味噌がそんなに」

いつの間にか同居人と化していた深雪は、いつの間にか冷蔵庫を掌握していた。

そして、いつの間にか味噌コレクションをしていたらしい。

「で、何作つてくれんの」

「食べ比べじゃダメですか」

「味噌の？」

「味噌の」

何で味噌だけなのと聞いたら、味噌って高いんでよと当然に返された。

つまり、

「味噌に食費をはたいたわけね  
「だつて味噌ですよ  
「そりゃ味噌だけじも」

調味料として活躍してこの味噌だとは思つが、しかし、空の青に立ち向かわんばかりのそれらは、深雪の前で堂々として見えた。

たかが味噌なの。

しかしながら、これだけの味噌なれば、深雪がその頭上に掲げる味噌より内容は濃いことだらう。

「人生つて深いね  
「何の話ですか  
「味噌の話  
「ニコアンスが……  
「味噌の話だよ」

言い切る。

「腹減つてきただじゃんか  
「味噌がありますつて」

あんたにもあればよかつたの。

そつま言わずに食べた白味噌は、思ったよりも濃厚だった。

「甘く見てた」

「意外と濃厚じゃないですか？」

「あんたと違う」

「だから、何の……」

「味噌の話だよ」

絶対違うと首を捻る深雪と味噌を見比べて、食べた白味噌は、何と驚きの八百九十円だった。

「高いー。」

「白味噌バカに出来ないですから」

「あんたと違う」

「だから何が……」

さて、明日からの飯をどうしようか。

「食事に誘われた」

「快挙ですね」

「……もっと何かさあ、盛り上がりみてよ」

「快挙としか言えません」

一応うだうだと続いている会社の後輩に、何とまあ、今度食事に誘われた。

うきうきはしない。

何故なら、あたしは年上好きだ。

「が、しかしだ」

ぐ、と握り拳のあたしの横で、深雪まだひとりでもよれりかに耳掻きをしていた。

本当にどうでもいいらしい。

「三年ぶりのときめき珍事なわけーーもつーれば、食つたりやつしかないわけ！」

「いきなりジャンプですねー」

「ホップもステップも踏んでらんない」

順番なんぞ気にしていたら、永遠にステップ止まりな気がする。永遠にステップって、どんなテンションだ。

「でも、見切り発車はよくないですよ」

「遅いよつよくない？」

「何の話ですか」

「発射の」

「発車の？」

「致してゐる最中の方……あ、終わりかな？」

言つて空しくなつたのは勘違いであつて欲しい。

発射とかファイニッシュシユとか、どんだけ飢えてんだつて話だ。

「あたしは飢えてない」

「覆しましたね」

「飢えてるつちや飢えてるけど」

「どつちですか」

耳掻きを終えた深雪が、冷蔵庫をがさがさと漁り出した。

「味噌しかないですねー」

「ないよ」

「お腹空きました」

「だから飢えてるつて言つたじやん」と言へば、「ああ……」と遠い目で答えられた。

「後輩に米貰つてきてください」

「その手があつたね」

「使えるもん使わないと飢えが満たされません

「味噌お握りが作れるね」

性欲より食欲。

男じゃ満たされないと語つた、荻窪アパート一室のあたし達だった。

後日、飢えが限界の深雪も連れて後輩との食事に行けば、ジャンプ

したのは深雪の方だった。

「見切り発射でした」

「あんたもね」

あな恐ろしきは美貌の彼女。

## 大人の事情（前書き）

愛憎渦巻く昼ドラマみたいなものが書きたかったようです。

わたしにとつて、義父は男でした

母はだらしない女だ。

それは何か一つに關してのことではなく、所謂、金、男、生活全てに  
そつと言える。

誰の子供かさえわからないわたしを産み育てたことは、ある意味奇  
跡に近いことだ。

それでも、親らしい愛情などさして感じたことはなく、幼い頃の学  
校行事など来てくれた試しあり。

だからと言って暴行を加えられたことがあるわけではなく、それは無  
関心や放置に近いものだ。

しかしながら大学まで通わせてくれた母を感謝こそすれ、憎んだこ  
とはない。

不思議に思ったことはあつたが、わたしにとつての日常はこれであ  
り、周りの反応も別段気になつたことはなかつた。

鈍感と言えばそのなのかもしれないわたしの感性は、この環境に適  
応していたとも取れる。

シングルマザーなど、今のご時世では大して珍しいものではないの  
だから、悲観的になることもなかつた。

様々なことにおいてだらしない母ではあるが、それ故に浪費される  
金は、パトロンがきちんと返済している。

不幸中の幸いとも取れる循環に気付いたとき、世の中は上手く出来  
ているものだと感心したものだった。

「結婚しようと思つた。」

珍しく団欒の場を設けられ不思議に思つていれば、見たことのない笑顔で、母はそうひとこと言つた。

結婚といふことは、おそらくは初婚といふことなのだけれど、母が離婚したといふ話は今のところ聞いたことがない。

「いいんじゃない。」

大学まで出してもらつたのだし、わたしももつ社会人三年目になる。義父が出来ることは不思議な感覺だが、拒否する理由はない。母がこれで落ち着くのなら、寧ろそれは喜ばしいことでもある。

「和希ならそう言つてくれると思つたわ。」

「やう、何にしてもよかつたじゃない。いい人に出会えて。」

「ええ。」

心底ほつとしたのは、娘としてか人としてか難しいといつだ。数々の目に余る母の行いに終止符が打てるのなら、どうかにせよいい結果なのだろつ。

「じゃあ、一度会つてみてくれる?」

「うん、わかつた。」

小さなテーブルを挟んで幸せに笑う母に同じく笑顔を返して、食べ終えた食器をキッチンと運んだ。

二十五歳で義父とは言えど父が出来るることに、心なしか嬉しいと思つたわたしは、少しだけ、本心からの笑顔だった。

田常に追われすっかり頭からあの日の会話など忘れ去つていた火曜日の午後。

同期のちひろと共にランチに出ていたわたしの携帯が鳴つた。

「もしもし。」

『あ、和希? お母さんだけ?。』

母からの電話など珍しい。

大抵は面倒だからと、メール一つ満足に返さない人だ。

「どうしたの。」

『今夜は暇?』

「まあ、仕事が片付けば。」

『会わせたいのよ、あの人に。』

あの人という言葉に、いつぞやの会話をようやく思に出した。

あれは一週間ほど前だつたろうか。

そうだ、わたしには義父が出来るのだ。

「じゃあ、何とかするよ。」

『今夜八時に、料亭松野屋でね。アオヤギ青柳で予約しておくれから。』

用件だけ伝えると電話はさつさと切れてしまった。

悪気がないことは百も承知で、それでもこんな素振りで社会に出て  
いる母を時折不安にも思つ。

悪気ないということは無意識に他ならず、無意識の行動は意識して  
いないからこそ質が悪い。

「誰?」

明らかに妙な勘違いをしていながら、母からだと告げ、メニューを開いた。

「へえ、この歳で義父さんね。」

ランチプレートのサラダを弄びながら、一通りを聞いたちひろが興味深い声を上げた。

「いくつの人？」

「さあ。」

「さあつて。」

「聞きましたから。」

付け合せを口に運びながら、そういうえばと思考を巡らせる。  
娘より年下とは考え難いが、あの母ならば有り得ない」とではない様なことではない。

わたしは〇しだが、同じ社会人であつても、母は夜の仕事をしている。

幼い頃はキャバクラであり、今はスナックで働いていた。

若い頃に生んだので、まだ四十一歳、花盛りといえれば花盛りだ。外見からは到底そうは見えず、恋人らしい男の影は常にあった。

「結婚決めたくらいだから、きちんとした人だとは思つけれど。」

「まあ、そうよね。」

頷きながらサラダを頬張るちひろを横田こ、やうであつて欲しいと、窓から見える空に目を細めた。

とにかくわたしは、八時に間に合つ様、仕事を片付けなければならない。

「頑張るか。」

「そうね。」

ちひろと田を合わせ微笑むと、少し楽しみにも思えてくる。このとき確かに、わたしは母を祝福していた。

何とか片を付けた書類に一瞥投げ、壁に掛かる時計に目をやる。七時半少し前を指す針に、漸く息を吐いた。

「何とか間に合つた。」

母は機嫌を損ねると面倒な程拗ねてみせるので、それだけは避けねばならない。

特に、こんな日はそうだ。

苦笑を滲ませながら薄手のジャケットに腕を通せば、裏地のサテン

がひやりと肌を刺激した。

バッグを肩に掛けたところで携帯のバイブが鳴る。取り出して開けば、案の定母の名前が点滅していた。

「もしもし。」

『和希、どう?』

「今から行くから間に合ひ思つ。」

『そう、よかつた。待つてるから。』

またも身勝手に切られた携帯をバッグに押し込んで、まだ残つていた同僚達に軽く挨拶をしながら、わたしは会社を後にした。義父が出来る、わたしに義父が。

初めてのことこの歳で踊る胸を抑えながら、料亭に向かう足取りは軽くもあり重くもあり、不思議な感覚に捉われていた。

待ち合わせの料亭は近辺ではそこそこ有名なもので、和風造りの門構えは、仄かな灯りで照らしだされ落ち着いた雰囲気を醸し出していた。

「青柳で予約している者ですが。」

「お待ちしておりました。お連れ様は既にいらっしゃりますよ。」

品のいい店員に連れられ廊下を歩く。

過ぎていく各部屋からは、いい匂いが鼻を突き、時折上がる楽しげな笑い声が、わたしの期待感を膨らませる。

「 ありがとうございます。」

「 ありがとうございます。」

桔梗の間と書かれた部屋の前で踵を返した背中を暫し見送つてから、一つ、深呼吸をした。

特別いい顔をする必要はない。

けれど、これからは家族になるのだ。

悪い印象を与えるのは得策でないし、そんなことをするつもりは毛頭ない。

どんな対面が一番いいだろうかと、余りにぐだらないことこの頭を悩ます。

母しかいなかつたわたしに、しかも、ごく一般的な家庭といつものからは多少なりとも離れた環境にあつたわたしには、それは至つて難しいことに他ならない問題でもあつた。

裸に手を掛けたまま悶々としていれば、からりとそれが呆気なく開かれる。

「 ああ和希、やつぱり。」

やや呆れた面持ちの母が、目の前で笑っている。

「早く入りなさいよ、外町さんも待っていたんだから。」

「…え？」

慌てて腕時計を確認すれば、針は無情にも八時十分を指していた。

「す、すみませんでした、遅れてしまつて…。」

申し訳ない気持ちで、母の肩越しに部屋を覗き込んだ。

「ああ、いや、ひかり急で申し訳ないね。」

柔らかなハスキーボイスに優しく細められた目、四十年中盤であるう歳の割りに、清潔感のある雰囲気と端正な面持ち。時が、止まった。

正確に言えば、それは錯覚に過ぎないけれど。

「和希？」

母の一聲で、弾かれた様に我に返る。  
小さく揺れた肩に、僅かな罪悪感が胸を掠めた。

「…大丈夫よ、本当に遅れてしまつてい」めんなさい。」

何事もない顔を作つて、母と共に部屋に入った。  
間違いなくこの時、わたしの目に映つた彼は、義父ではなく一人の男だった。

簡単な自己紹介の後、他愛ない会話でその場をさりげなくやり過ごしながら、傾けたグラス越しにそつと彼を盗み見る。

青柳冬吾あおやぎとうごと名乗つた男は、終始満たされた表情で母と談笑していた。

それはそうだ、彼は母と結婚する。

母と結婚を決めたくらいなのだから、少なからず出来た男なのだろう。

醸し出す雰囲気はもちろん、ぴしつと調べられた品のいいダークグレーのスーツが、自ずとそれを物語る。

品定めながらの行為は果たして、母の夫としてか、義父としてか。そのどちらでもないことを、わたしは既に承知していた。

「和希、さつきからじつしたのよ。」

母の言葉に、思考を一回中断する。

「飲んでこるわよ。」

「やつじやなくて。」

「やひ…やつ…やつ…」  
「やひ…やつ…やつ…」

ふいに口を挟んだ彼が、少し寂しげな笑みを浮かべた。

「そんなこと。」

今出来る精一杯の笑みで返すわたしは、狡猾な女狐の様だ。  
それに気付かない母に内心ほくそ笑みながら、彼 夏吾をとて  
向かつて言葉を続ける。

「素敵なお義父さんで緊張しちゃって。」

「ふふ、でしょ。」

至極幸せに笑つ母の隣で、一瞬、本当に一瞬、眉をひそめた表情を  
捉えた。

気付かれただろうか。

わたしの向ける視線が、彼が求めるそれと違つ意図を含んでいる  
ことに。

「…そつかな、わたしもだよ。」

思い直したのか気の所為だと思ったのか、すぐさま戻された表情か

ら、それを読み取ることは出来ない。

気付いてしまえばいいのに。

そつ懲つてしまつわたしは、とんだ親不孝者に違いない。

「こつから回屈を。」

空のグラスに手酌で並々ビールを足しながら、何気ない素振りを  
装つて尋ねる。

「出来るなりすぐこでもしたいわ。」

「せうだなあ。」

「籍は入れてから?」

「わたしはびきりでもいこよ。田舎者には…。」

「いやだわ、もう。源氏名はやめてよ。」

びつやうじの密であつたらしい。

会話に参加しつつ田を細めた自分の頭の中が、酷く冷静に分析して  
いることに、わたしの中の女を再確認した。

ほゞよく酔いが回ってきたのか、母が冬服を女の腕に絡み付いてい  
く。

母の女である部分を田の辺たつにすむ」とは、決して初めてではな  
い。

笑顔は貼り付けたままだが、内心は面白くなかった。

「ちゅうとおゆゑさん、あたしもこるのよ。」

「アリだよ皿ヶ嶺さん、希望さん、和希ちゃんが…あ。」

「え？」

母の名前を直に直したかと思えば、ばつが悪そつて叫んでいた  
しを見た。

「じりか？」

首を傾げて問い合わせれば、四十代とは思えない顔で、酷く可愛らしくはにかんで応える。

「こや、君の年齢を考えると和希ちゃんはないかなあと…。」

その表情に、その台詞は狡いのではないか。

確かにちゃん付けで呼ばれることなど、最近はめっきり減った。  
そんな歳でなにとも、しつかり自覚があるけれど。

「こえ、構いませんよ、お義父さんですもの。」

そんなことは微塵も思つていなかつたけれど、何となく嬉しくなり、笑顔でそう応えた。

母が泥酔したものの、初の顔合わせは上々であつたわけ。現に気分屋の母は終始笑顔で機嫌がよかつたし、冬香さんも同じく饒舌であつた。

僅か匂わせた女の部分でさえ、終わる頃にはさして氣に留めてはいない様子だったのだから。

「じゃあ、わたしはこれで…。」

「あら、こじやない、今日は帰りたくない気分だわ。」

お開きとこいつといひで媚びた様に駄々をこねる母に、一瞬だけ冷ややかな視線を向ける。

「和希ちゃん？」

訝しげに呼ばれ、またすぐ笑顔を貼り付けた。

「いえなんでも。すみません、いつまでも子供みたいで。」

「いや、しかしどうしたものかな。」

せつめ口にしてみても、決して冬吾さんの表情せつめでない」とへらりと一目瞭然であった。

「今夜はどうかに泊まつてきたらいかがですか。わたしは大丈夫ですか」

今とのところはす、にいやかで物分かりのいい娘を演じてみせる。

「わうか、すまないね。」

「いじえそんな、母をお願いします。」

深々と頭を下げてから、片手を振つて遠ざかる背中を見送つた。遠くなるそれが今のわたしと彼の距離なのだと、妙に冴えた頭で思ひながら、どれだけ自分が狡猾であるのかと少しだけ反吐が出そうにもなる。

ああそつか、自分も女なのだ、一目惚れをすれば嫉妬もする。相手が例え母であろうとも。

「…飲み直すかな。」

小さな呟きは呆気ないほど夜の喧騒に飲まれ、見えなくなつたその

先を只、目を細めて見据えていた。

義父であろうと、母の相手であろうと、わたしは確かにあの男が欲しい。

そう思つてしまつたのだから、もう仕方がないのだ。

大人の事情で振り回された過去を悔いてはいない。

だから今度は、それを利用してやるまでなのだと、

踵を返し、ヒ

ルを鳴らしながら、わたしは何故か、笑つていた。

## 取るに足らない関係

昨晩、母は帰つて来なかつた。

当然といえば当然だが、がらんとしたリビングに、胸くそ悪く思つた自分がいた。

現状で冬吾さんは母の恋人であり、泊まつたのならする」となど知れている。

それがわからない程子供ではないし、出会いが出会いだからこそ、嫉妬するだけ馬鹿げていることも頭では理解していた。

眉間の皺を伸ばしながら悶々とする思考を振り払い、まだ残るアル

コールを飛ばすべく、バスルームへと、足を運んだ。

「おはよう和希。昨日はどうだつた?」

いつもより早く着いた会社に入れ、ちひろが笑顔で近づいてくる。どうだつたかと言えばある意味手応えはあつたが、もちろん、そんなことを言つつもりはない。

「いい人だつたよ、よく出来た人。」

「よかつたじやない。」

自分のことの様に喜んでくれたちひろに、少しだけまた、眉間に皺が寄つた。

母に対しては感じなかつた罪悪感。

ちひりに對して感じるのは、間違になくそれだ。

「「」めん。」

「こやね、何のことよ。」

きょとんとして微笑むちひりは、良き同僚であり、良き友人でもある。

「…心配せせてつけて」と。

「…いのよ。」

本心を言えないからだとは告げずに、また、嘘を重ねたことに。全てに対する謝罪を口にして、笑ったわたしは、やつぱり狡い。

それから他愛ない話をして、ランチの約束をしてから席に着く。昨晚片付けた筈の書類の上には、初めて目にする、わたしのものではない新たな書類が積まれていた。

思わず深い溜め息を零してから、隣の席に視線を投げる。いつの間にか出勤していた席の主は、へらつと笑つてそれに応えた。

「…松本、どうこいつ」と。

「おはようございます。」

「おはようじゃないわよ、これ、あなたの仕事じゃない。」

よく言えば柔らかな笑みを浮かべる、悪く言えば気抜けた雰囲気の彼は、ちひろと同じく同僚の松本春田まつもと はるひ。地毛だといつ柔らかな茶色の髪をふわふわさせて、にこやかな顔でわたしに仕事を押し付ける曲者だ。

「昨日の内に仕事片付けてたみたいだから、少し、手伝つてもうりあうかと。」

悪気なく笑うそれも、既に、日常茶飯事である。

「少しじゃないわよ。」

どれだけ押し問答をしたところで、結果は既に見えていた。また溜め息を吐きながら、肩を落として、仕方ないながらも書類に目を通すこととした。

取るに足りない関係（後書き）(あき)

このページ自体がまた書き途中……。

1 (前書き)

暗い感じの不倫ネタ。

堕ちたとしても、それはそれでいいとさえ思つた。

貴女が一緒なら、どこまでもとさえ、俺は本気でそう思つていた。

隔てる薄く滑らかな皮膚でさえ、今は酷く邪魔に思えた。

こいつって個体である限りそれほどにもならないことであり、交わることで融解してしまえばなど、到底不可能な幻想に過ぎない。淫らにシーツの波間に泳ぐ貴女を捉えている筈の行為も、事が済めば、一瞬の様に思えた。

「…じつったの?」

はあ と軽く吐息し、甘美な余韻を残す潤んだ皿を向けて、ひとみさんが身じろぎをした。

そんな姿を見せるのが俺だけでないことを考えると、それこそ、焼け付く様な嫉妬が胸を渦巻いていく。

「…ひとみさん、が。」

白く豊かな胸元に顔を埋め、縋る様に腕を巻き付けた。

「…ひとみさんが、俺のものじや、ないから。」

くぐもつた声は自分で思つより頬りなく、それこそ、母親に泣きつく幼子そのものだ。

くすくすと、小さく笑つた音がする。

いつそ嘲笑であつたなら、貴女を殺して俺も死ぬのに。

「貴方、らじしないわね。」

優しく俺の髪を梳き、ひとみさんはそつ零した。  
確かに今までの俺らしくはない。

散々と言つてもいい程女を漁つて、寧ろ、漁らずとも寄つてきたそれらを右から左へと流すが如く食い散らかしてきた。

愛なんて存在はどうでもよかつた。

只の欲の捌け口として、口実程度に口にしたことしかなかつた。

回した腕に力を込めれば、細腰は容易く折れてしまいそうで。

プライドの高い俺は、旦那と別れてくれとは、きっと、口が裂けても言えないから。

「…」のまま死のつか。

真昼の見えない星に揺れて、掴めない星に焦がれて、誰かを殺めて

じまつ前へ、せめて、せめて俺と一緒に墮ちてい。

多分欲しいのは愛ではない。

欲しいのは器でも心でもない。

貴女そのものが欲しいと言つたら、どんな顔で笑うだらうか。

夢中で滅茶苦茶にしていて、全く気付かなかつた。

「ひとみさん、これ……。」

「え? ……ああ、ちょっとね。」

無防備に背中を見せて少しだけ笑つたひとみさんの表情は見えない。安っぽいベッドライトに生白く浮かぶ愛しい肢体。視線を這わせた先、左肩甲骨下には、煙草を捻じ付けられたであろう火傷が、三つ程あつた。

「ど」「が”ちょっと”なの?」

「大したことな……痛つ……。」

人差し指を当ててぐつと押せば、案の定思つた通りの反応を返すひ

とみせん。

「痛いんじゃない。」

「それはもうよ、そんなことされたら。」

くるりと寝返りを打つてこちらを見たひとみせんが、苦笑混じりにそう言った。

こんな痕を付けられて、それでも尚笑うのか。  
俺は、赤い花痕さえ許されないとこつのに。

「どうしたの。」

目を逸らした俺を覗き込む様にして、艶めかしい切れ長の瞳が見上げてくる。

「…何でも。」

細い顎を掬い上げて、貪る様に口内を犯した。  
願わくは、この星がいつか俺に墮ちる様に。  
朝も昼も夜も、俺だけのものである様に。

腕の中で淫らに啼く幻想だけでなく、永遠になる様に。

「…戀してゐる。」

快樂に引寄せられていく瀬戸際で、小さく小さく、愛を囁いた。

## ～まさと一緒（前書き）

メルヘンチックホラーなつもりで書き始めた結果、何故か宙ぶらりんになってしまったお話。  
個人的に気に入っているので、もしかしたらそのうち再開するかもしれない……。

あたしの部屋には、くまさんがいる。  
可笑しな話だけど、いるものほいるのだ。

今は机の上で、ファッショングッズ雑誌を読みながら人参を生で食いつけてたりする。  
うさぎさんじゃない。  
くまなんだ。

「ちょっと……皮剥かないの？」  
「ああ？ いいだろ、めんどくせえ」  
「いいならいいけど……」

そもそもどこで消化しているのかとか、どうやってたら食えるのかとか、愚問に違いない。

皮を剥くか剥かないかなんて、それこそどうだつてここのだらつ。

口の回りをカスだらけにして、下着特集のページばかりをページペラと捲っていた。

そもそもなんでくまさんがいるのか。  
ことの発端は、バイト帰りの真夜中だった。

「あー遅くなっちゃったな

自転車を押しながら、吐いた息は白い。  
コンビニーバイトは十時までだつたが、廃棄を食べながら喋っていた  
らあつところ間に十一時を過ぎていた。

「……むすり

ハンドルを握る手は、すっかりかじかんで赤くなっている。  
とてもじゃないけど、今更乗る気にはならない。

帰り際にむりつたホットのお茶が空になり、すべせじこあつたごみ  
箱に投げ捨てた。

「いじつ

「あ、ごめんなさい」

反射的に謝つてから、遅まきにぎくつとした。

真夜中の公園を横切ると近道だと思つたけど、よくよく考えれば、  
安全ではなかつたかもしれない。

空のペットボトルは、誰かにストライクしたと思われる。  
が、それは確かに、くたびれた電灯脇のごみ箱に入つていた。

何

“おこひる。

よくわからな「おじなんだか」わかったので、とつあえず逃げる」とひした。

急いで自転車にまたがり、これ濡れ田んぼといったそのじや。

「おこ、ためえ。逃げるんじやねえよ」

「ひつ」

やたらとジースのきいた声に、前傾姿勢まま肩をすくめる。ペダルに掛けた足は、すくんで動かなかつた。

早く帰れよかつた。

廃棄のやきとりなんか、食べなければよかつた。ペットボトルなんか、捨てなければよかつた。そもそも公園なんて通らなければ……。

「おこ。とつあえずひつから出せ」

「あひと皿をつむつて悶々としてこれば、少し和らいだ声が、「ひみ箱から掛けた。

「……おこ。早くしる」

「一度田の催促で、そろそろとせ」に田を向ける。

やつぱり、誰もいない。

「おいー。」

田を凝らして見れば、もそもそと動く「み箱の中の何か。電灯に照らされて、茶色い何かが見えた。

犬か猫か。

いや、そもそも犬や猫は人語をしゃべるのか。

「おい、早くしろー。」

「……はあ」

そろそろと近づきながら、なんとも曖昧な返事をする。  
そしてそこを覗き込んでみれば。

赤まみれのくまさんがいた。

「……えつと」  
「……なんだよ」

黒い大きな目はボタンで。

「……えーっと」

「……なんなんだよ」

ふわふわの茶色い毛並みはモールで。

「……えーっと……」

「……おー」

付着している赤いのは。

「……血、ですか？」

ぬいぐるみなくさんは、独特の臭いを放つ血まみれのくまさんだ  
つた。

どうこうことがどうこうふうになつて、血まみれのくまさんが人語  
をしゃべるのだろう。

なにがどうなつたら、公園のごみ箱に入つているのだらつ。

ギャップに翻弄されつつ、"あなたの知らない世界"に迷い込んだら  
しいあたしが、悶々と顔をしかめていれば、くまさんがついに怒つ  
た。

「ここから早くここから出せー。」

「……はあ」

セツヒであたしは、くまさんを拾つた。

出したてやるだけでおかつたのだらうかど、くまさんが肉まんを食べたいと叫び出した。

食べられるのかが気になつて、コンビニで肉まんを買って、アパートに連れ帰つた。

結局、くまさんはそのまま居座つたわけで。今現在も、人参をかじつてこる。

「やつべえな、この下着。腸ほじくつ出して、真つ赤にしてやつてえ」

どんな下着を見てるのか知らないが、くまさんの性癖はおかしいらしい。

ぼりぼりと人参を貪る音が、断続的に部屋に響く。トイレに行くのを見たことがないけど、あの中は綿<sup>わた</sup>じゃないんだろうか。

「お、そろそろ時間だな」

人参を投げ捨てて、くまさんが立ち上がった。

「どうやらお仕事の時間らしい。」

口元をぬぐつて、代わりに手のモールにカスがついていた。

「ついてるから」

「おう、わついた」

おとなしくカスを取らせてくれながら、黒いボタンの目が、あたしを見ていた。

「……くまさんの仕事つてや」

「ひどいわ」

小さく問い合わせたそれに、別段どうとこつけでもなきついに応えるくまさん。

どうやつたら、くまのぬいぐるみが人を殺せるのだろう。

それはわからないけど。

「じゃ、行ってくつか」

「……こつこつしゃい」

玄関からひょいひょいと田かたへまわさせ、今日も、血まみれで  
帰つてくることだと想ひ。

だな、とたゞ、今日も田畠も、くまれとこりしよ。

バイトが終わって帰宅した午後十一時四十七分。

冷静にも腕時計を確認したから、たぶん時間は間違いない。

「ただいまー……」

「あら、おかえりなさいーい」

アパートの軋んだドアを開けてみれば。

「あら、どうしたのよ。入ってきたら？」

六畳一間のそこに、赤まみれのくまと、テラコッタ肌の美人バニガールが、仲良くポテトチップスを食っていた。

どうこうことなのか。

あたしの脳味噌がこの情報を処理するのに、えらい時間を要したのは、言つまでもない。

早くいらっしゃいよとともになげに促すバニガールに釘付けなまま、ようやく動きだした脳味噌とあたし。

仕方なく、スニーカーを脱いで、ペットボトル片手にその団らんに参加することにした。

「あの、くまさん、いかがは……？」

わけがわからないので、取り敢えず間を空けて座つて問い合わせる。

相変わらず食べカスだらけ赤まみれのくまさんが、ぱりぱりポテトチップスを食つたままに応えた。

「仕事仲間だよ」

「仕事……仲間」

「そう、よろしくねえ」

綺麗に笑つたバーガールのすぐ隣には、やつぱり、赤まみれのチーンソー。

当たり前のようになに置かれたそれは、部屋の中で、一際異彩を放つていたけれど。

追い出すのが正解かもしね。

そもそもが、よくよく考えてみればそうに違いない。

だって、くまさんは仕事から帰ればいつだって赤まみれ。

このバーガールも、チーンソー持ちだなんておかしい。

おかしいも何もない。

どうやつてここまで持つてきたんだ。

黙つて思考を巡らせつつもぱつぱつとチップスを食るしかないあたしの傍らでは。

「お前またやつたのか」「やつたって、どつち?」「どつちもだろ」

……明らかに、いつであるにはおかしな会話が繰り広げられている。やつぱり、一重に退室をお願いしたいと思つた。

「だつてすきなんだもの。仕方ないじやない、ねえ?」

バーニガールが綺麗に笑つて、こともなげに、突然あたしに話題を振つた。

ねえ?って言われても。

「何がすきなんですか?」なんて、あまりにこわくて聞けないに決まつてゐる。

「そつなんですか……」

何がそうなんですかなのかねえ、もう、あたしには未知の世界でわからなけれど。

曖昧な相槌に、彼女が機嫌を損ねることはなかつたらしかつた。

ぱりぱりと場違いな音が響く中、さて、と腰をあげたバニー・ガールがチエーンソーを軽々しく持ち上げる。

隣を掠めた鉄の匂いは、嗅いだことのある、不愉快なものだった。

「じゃあ、そろそろおことまじょうかしぃ」

「仕事か？」

「うーん……趣味かな？」

趣味って何ですか。

やつぱりそは聞けなくて、寧ろ聞きたくなくて、聞こえない振りでチップスを頬張った。

華麗なステップで闊歩するガーター付きのおみ足を眺めながら、このバニー・ガールが“趣味”だと宣ったこれからを想像する。

……こわい。

やつたつて言つてた。

やつたつて。

どつちもつて言つてた。

どつちもつて、どういつことだ。

かつ、とハイヒールを履いた彼女が、一度だけ、あたしに振り向いて言つた。

「あ、裏路地は入らないようにね」

ばたん、と閉められたドアを見送つて。

「……くまわん」

「あ？」

「……もう、仕事仲間は勘弁してくれないかな」

ぬいぐるみじやない生身の人間だと、妙にリアルに想像をしてしまうから。

そこまでは言えずに、ただ、裏路地には入らないようにしようと、チップスを飲み込んで、妙な気持ちになつたあたしだった。

## 「わがままも一緒に（後書き）

バーニガールの元ネタは自サイト短編『テラコッタバーニガール』。こちらに掲載するには少しばかりアダルティだつたので置いてません。

気になつてくださつた方は、自サイト『樂觀的木曜日の女』のShortex TEXTカテゴリよりどうぞへへ

## くまちゃんの謎

くまちゃんには謎がある。

くまちゃんはぬいぐるみ。

くまちゃんはくまさんであつて、やつてこぬことはぬいぐるみらしからぬ」と……かどつか、実際は知らなにけれど。

くまちゃんはぬいぐるみ。

くまちゃんは赤まみれ。

くまちゃんは、何者？

黒いボタンの目は、どいつも見ているのかわからない。

茶色いモールの毛並みは、いつだつて食べカスまみれ。

お仕事帰りのときは、得体の知れない赤にまみれてい。

が、くまちゃんはぬいぐるみだ。

でつかくもなく、寧ろ、小脇に抱えるにはちょうどいいサイズ。

「くまちゃん、今日仕事は？」

「てめえは毎日、俺にひとりじめられてか」

そんなことは言つてないけれど、いろいろ聞かたいことがあつず

た結果、口を突いた言葉がこれだつた。

## へまわさの謎（後書き）

このページも書き掛け放置中。  
いつか書き切りたい。

オルゼウス[歴499年12月]、世界は500年に一度の大厄災に見舞われていた。

「迷信だと思っていたのに」

魔法術師エウレカは、そう咳き下唇を噛む。

乾いた唇からは、砂と血の味がした。

彼はまだ若く、魔法術師としても歴史学者としても未熟だった。故に、古文書に遺された500年に一度の大厄災についても、強者であつた時の王オルゼウスが、そうしたためさせたに過ぎないのだと、通説を信じていた。

そうだと信じていたのは彼だけではない。

ほとんどの魔法術師が、歴史学者が、王族貴族が、国民が、この世界の全ての民が、そうだと信じていた。

ただ一人、彼の師匠である魔法術師ザーニイを除いて。

「そんなこと言つてゐる場合ぢやないでしょ、エウレカ」

ぱんつと砂漠を叩いた彼の魔法錫の下に、一瞬にして魔法陣が広がる。

もう幾つ、こんなものを描いただろう。

もう幾つ、これが破られただろう。

エウレカは地道な作業を続ける自らの師匠に複雑な視線を向けた。それに気づいたザーニィは、ただ、肩を竦めるのみだ。

「出来ることを最大限にするのみだよ。我々には、彼女のような力はないのだからね」

「彼女……ですか」

エウレカは遙か先、しかし、すでに迫り来る大厄災に立ち向かわんとする一人の少女の後ろ姿を目に焼き付ける。傍らには、常に寄り添っていた黒く気高き獣の代わりに、漆黒の髪に褐色の肌をした青年がいる。

少女は何を思っているだろうか、青年は何を思っているだろうか。彼女が力を尽くさなければ、この世界は滅びるしかないと言へ。たつた一人の命が、世界を救うのだと。

彼女の力は確かに桁違いだつた。

押し寄せる大厄災を片つ端から斬つて捨てる。

小さな体に似合わぬ長剣と、一丁の長銃を駆使して、砂漠を駆け抜ける。

その傍らでは褐色の青年が、漏れ出た厄災を魔法術と一刀流の剣で仕留めていた。

彼女は確かに桁違いだつた。

だが、それでも人間であり、体力も力も無尽蔵ではない。

「…………」

青年が呼んだのは彼女の名前だったのだろうが、遠くて聞こえなかった。

しかし、この目が捉えた光景は、片腕を食い千切られた少女の姿。

「！？」

知らず息を呑んだのは、それだけが原因ではなく

「……500年前、真の世界の救世主は、オルゼウスではなかった

ザーニイの静かな声が、エウレカの耳に響く。

「救世主とは贊　　オルゼウスとは、贊の使い方に気づいた者の名  
だよ」

少女の腕を食い千切つた厄災に、他の厄災が群がっていく。  
それらはまるで魅入られたかのように厄災同士で共食いをし、そして、一気に崩れ落ちたかと思うと浄化され消えた。  
その浄化にまた付近の厄災が巻き込まれ浄化される。

「彼女は　　贊……生贊……？」

エウレカの声は震えていた。

A · i 499 · 12 (後書き)

データの中から発掘したもの。  
仮タイトルです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0180z/>

---

妄想ウサギSIDE

2011年12月21日11時47分発行